

【塚田農場との出会い】伊藤愛子

私は塚田農場という全国に150店舗以上ある居酒屋で働いています。

私は接客が大好きです。毎日お客様に喜んでもらえる。目の前の人の喜びになる。それを毎日味わうことができる接客業って最高の職場です。

私が心から楽しんで働いているといろいろな事が起きます。

例えば鹿児島県の新店舗に応援で働きに行ったとき、初日に来店してくださった30代の女性のお客様が、「愛ちゃん10日でかえっちゃうの?」と言ってくださりなんと10日間で5回も来ていただきました。

そんな感じなので、自分が普段働いているお店でも常連のお客様がどんどん増えていきます。接客をしているとなぜか恋愛相談になることが多く、相談にのったお客様から報告があっただけで67組のカップルが誕生しました。

S1サーバーグランプリという接客コンテストに出場しました。全国の飲食店から1000人がエントリー、たくさんのお客様が神田明神に私の優勝祈願のお参りにいってくれて、そのエネルギーを頂き私はなんと準優勝することができました。

多くの人に支えられ今の私があります。ニューハーフの私が、女性として普通に働けること、それは当たり前なんかじゃない。奇跡のような事なんです。

私が、人と違うっ思ったのは、20歳で彼女が出来た時のことです。

デートのとき昼間は楽しいのですが…夜があるじゃないですか?それが肉体労働にしか思えませんでした。そこで私は人と違うということをはっきり認識し、女性として生きると決めました。

それから、女性として、バイトの面接に行きました。でも、全く採用されません。300社以上受けて、すべて落ちました。お店のドアを開けて「無理」といってドアをしめられたり、体のことをさんざん聞いたあげく「取るつもりはもともとないから」と言われたり、ある飲食店の店長には、30分説教されました。

「親に申し訳ないと思わないの。お前不細工だから女として生きていくのは無理」と言われたあげく最後に履歴書を取り上げ、お前なんか雇う会社ないからこれいらぬよと言って履歴書を目の前で破り捨て、拾ってから帰れよと言われました。

そんなとき、7つ下の弟が結婚しました。奥さんのお腹には赤ちゃんがいて、本人も両親もその周りの人も幸せに包まれているのを見たとき、私の頭の何かが「バーン」と壊れました。

私は家を出ました。

北海道が大好きだったので、人生の最後に北海道でおいしいものを食べて死にたい。そう思い、札幌に向かいました。高級なお寿司を食べ、カニを食べ、海鮮丼を食べ、すべての予定を終えた私はホテルで一人首を吊りました。

気が付くと床に倒れていました。

縄をかけたところが折れてしまい、私は死ねませんでした。

でも、どうすればいいかわかりませんでした。

ふと携帯をみると、着信履歴がお父さんとお母さんで埋まってました。数分間隔で着信が数百件あるのを見て、結局家に帰ることにしました。

帰った私は家に引きこもったり、男として生きるチャレンジをしたりしましたが、やっぱり女性として生きたい。そう思い、また面接を受け始めました。でも現実は厳しかった。ここからまた300回の面接の旅がスタートしました。

そんな私に転機が訪れます。塚田農場との出会いです。面接をしてくれた当時のエリアマネジャーの天野さんが何度も会社にかけてくれ、僕が責任をとるから採用させてほしいと言ってくださり、採用が決まりました。「やっと女性として働ける。なりたい自分になれる！」そう思って働きだしました。

でも全くうまくいきませんでした。なぜなら怖かったからです。

ニューハーフだとばれないように働いていました。女性のふりをして働くんです。否定され続けた面接体験が私の中でトラウマになっていました。おしぼりをもって行って「こんばんは」と声をかけることすら怖かったです。

「塚田農場は若くてかわいい女がいるって聞いたから来たのに。お前は若くもない、かわいくもない、女でもない」と言われたこともあります。

すべてが怖くてビクビクしながら働いていました。ネットに悪口を書かれているのではないかと不安になり「塚田農場 ニューハーフ」と検索したりもしていました。

そんな状態が2年くらい続きました。

そんな時、新しくオープンするお店への応援に行くことになり、新人スタッフのトレーニングを任されました。

ある問題児がいました。19歳の女の子。いくら教えてもふてぶてしい態度。返事はするけど目は見ない。不機嫌な態度を、お客様の前でも平気でとってしまう。そんな子でした。

私はどう接していいかわからず、「応援だし、これ以上はもういいかな」って思うようになりまして。最終日が近付いたある日、事件が起きました。私が教えているとき目もみずそっぽを向いて、はいはいとあからさまに不機嫌な態度をとった瞬間、私は思わず言ってしまったのです。

「お前ふざけんじゃないよ。いつまでそんな態度とってんの？ 自分が心を開かなかったら相手も開かないからね！」

私は今しかないと思い、彼女に伝えなかったことをすべて伝えました。すると彼女は泣きながら言いました。

「ここまで本気で言ってくれた人はいませんでした」

初めて彼女が心を開いた瞬間でした。

そこから彼女はどんどん変わっていきました。あきらかに声のトーンが変わり笑顔でお客様の目を見て接客するようになりました。心を開いたからお客様は笑顔になる。今までは心を開いていなかったから何も伝わってなかったんです。

でもそれは、私も同じでした。

彼女に言うべきことを言えてなかった、お客様にも踏み込めていなかった。逃げてました。怖かったからです。

でも自分が心を開かない限り、相手も開かない。

思わず言ったこの言葉は、他の誰でもない、私に必要な言葉だったのです。この日から私は変わりました。

「嫌われたって構わない。その子が良くなるためだったら」

相手に心を開く勇気が持てるようになりました。

これまで、私は自分のことが大嫌いでした。でもわかったんです。

ニューハーフだから周りが受け入れてくれないんじゃない。私自身が、他の人と違う自分を受け入れていなかったんです。

だ から周りが受け入れなかった。

塚田農場で働くことが決まった時、私は不安でいっぱいでした。一緒に似くスクッフが私のことを受け入れてくれるだろうか？ 不安な気持ちでいっぱいでした。

でも現実には想像とは全く違ってました。びっくりするくらい受け入れてくれるんです。

一番不安だったのは更衣室です。女子と着替える事になるんですが、中には嫌な人もいるだろうなと思ってました。でも全くいないんです。初日から一緒に着がえていました。

そうです。私よりみんなの方がニューハーフである私を当たり前のように受け入れてくれていたんです。

私は変わりました。

私を受け入れてくれる塚田農場に出会ったからです。

会社は私を採用してくれた、

みんなは一緒に着がえてくれた、

お客様は会いに来てくれた。

私は変わりました。

私を受け入れてくれる人に出会ったからです。

私はやっと私自身のことを受け入れられるようになりました。

私が私のことな認めてあげることが、すべてのスタートラインでした。私は私でしかない。この世界でたったひとりの私、それを受け入れたときすべてが変わりました。

一緒に働く仲間、毎日来店されるお客様、出会うすべての人がみんな違う。

みんな違ってていい。

だから私も生きてていい。

今、私は自分の事が大好きです！

自分を愛せないものを人が愛するわけがない。

私はもっと自分のことを好きになります！

そしてもっと人の事を好きになります！

「私は自分の仕事が好き」（鴨頭嘉人著）より抜粋